ビジネスインテリジェンス指向のＤＢ構築

－あなたのＢＩ活きてますか？－

アブストラクト

1. はじめに

ビジネスインテリジェンス（ＢＩ）という言葉は、５年ほど前から世間一般に広まっており、多くの企業でＢＩツールを導入してデータの活用に取り組んでいる。しかし、各企業の導入効果という観点から見てみると、「導入はしたものの充分に活用できていない」といった内容の回答が多く、決して満足度は高くないのが現状である。そこで、ユーザの満足度が高くなっていない原因がどこにありどのように対処すれば良いのか、本来ＢＩに求められる利用効果とはどのようなものでありどのような手段で実現して行けば良いのかを追求することにした。

2. ＢＩの定義

我々は、「ＢＩ指向」とは何かということについて共通認識を持つためＢＩを以下のように定義した。

- 社会全般から広くデータを収集し、ビジネス上の意思決定を的確に行なうための情報として活用すること
- データにビジネス上の知識を使用し、情報→知識→知恵→ルールを導き出し、ビジネスに反映させること
- 経験者のみが持つ「暗黙知（ノウハウ)」を企業全体で共有し、企業財産として活用すること

そして、ＢＩの実現を目指すために、２つの角度から分析を行なった。

(1) ＢＩ（DWH）の現行運用での問題点の解決によるＢＩの実現

(2) ＢＩツールの新機能追求によるＢＩの実現

3. 問題点解決からのアプローチ

現在データウェアハウス（DWH）を導入している企業で問題になっている事項を抽出し、その問題点を分類して根本原因を追求した。そして、根本原因に対する解決策は、以下の３点と考えた。

体制の整備

- キーマンの設定
- 運用グループの設置
- ヘルプデスクの設置

教育の充実

- 教育カリキュラムの細分化
- 教育体制の整備

環境の整備

- 項目辞書の作成指針
- メンテナンス指針

4. 新機能追求からのアプローチ

一般の導入事例よりユーザニーズを調査し、どのような要件が求められているかを分析した。ここから「ＢＩを実現するための１０の要件」を導き出した。

≪ＢＩを実現するための１０の要件≫

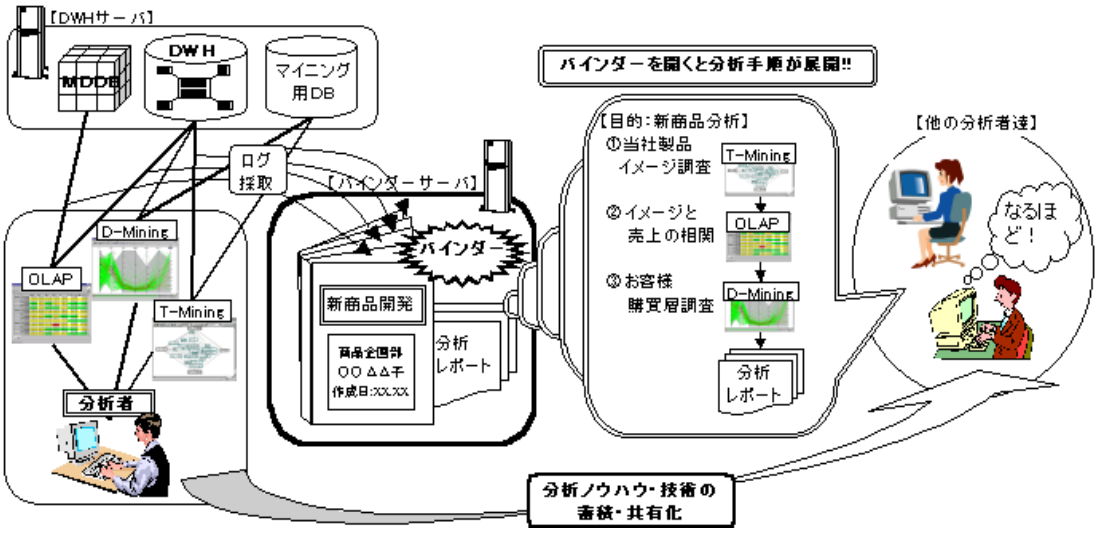
①様々なデータの取り込み	⑥外部（インターネット）データの検索
②自動マッピング	⑦分析手順の保存・再利用
③異種データの統一的検索	⑧信頼性のあるビジネスルールの自動導出
④異種ＲＤＢＭＳの検索	⑨分析ノウハウ（目的・手順）の蓄積・共有化
⑤テキストデータのＡＩ検索	⑩分析後のアクション・結果の収集・比較

この１０の要件と現行ツールの機能のギャップを洗い出した。その中で、ＢＩを実現するために要求される機能で我々の注目した部分は、⑦～⑩にて挙げられている要件である。なぜなら、これらの要件は、分析、ルールといった暗黙知（ノウハウ）の共有を目指すものであり、この暗黙知の共有がより良いＢＩサイクルを実現するために最も重要な要素であると考えるからである。そこで我々は、⑦～⑩の要件を実現するためのツール機能の一つとして『ＢＩバインダー機能』を考案した。

『ＢＩバインダー機能』

分析者の分析手法そのものを、ノウハウとして蓄積し、他の分析者と共有する機能。

- 分析時の操作ログや分析の目的、分析過程の着目点などを「バインダー」に保存できる。
- 他の分析者は、「バインダー」の再現機能を使用し、分析ノウハウを習得できる。
- 意思決定者の分析内容だけでなく、他の分析者の意思や分析内容も情報として蓄積できる。
- 分析によって得られた知識がどのように実際の行動に結びつき、どのような結果が得られたかといった情報を蓄積できる。



5. おわりに

我々の研究では、ＢＩをあらためて定義し共通認識を持つところから開始した。そして、我々が定義したＢＩを実現するためには、『人的な側面』（使う側）の問題解決、つまり、体制の整備・教育の充実・環境の整備を行なう必要がある。この解決策は、今後ＢＩを運営する利用者に対しての処方箋として活用できると考える。しかし、ＢＩ実現に向けて『人的な側面』だけを捉えたのでは不十分であり、『ツール機能の側面』（使われる側）の強化を図ることも同時に進めていくことが不可欠である。これに対して我々は、ツールに要求されるべき１０の要件を示した。この１０の要件は、ツールを提供するベンダに対しての指針となり得るであろう。その中で我々が具体的に提案した『ＢＩバインダー』は、暗黙知を企業の共有財産とすることができ、より良いＢＩサイクルを実現することができる。ツールを提供するベンダにおいて、この機能が実装されることを期待する。